11　次の文章を読んで、後の問に答えよ。 　　〈名古屋大〉二〇一九年度出題

プナンの民話は、動物譚の宝庫である。

　かつてマレーグマだけに尻尾があり、他の動物たちにはなかった。マレーグマの尻尾は格好よく見えた。動物たちはマレーグマのところに出かけて行って、尻尾を分けてくれるように頼んだ。マレーグマは来る動物来る動物に、気前よく尻尾を分け与えた。最後にテナガザルも尻尾をねだりにやってきた。しかしその時には、マレーグマに尻尾の手持ちがなくなっていた。それで、今日、マレーグマとテナガザルには尻尾がない。

　マレーグマは、人はケチであってはならない、寛大な心を持つべきだという、人に範をａタれる存在として描かれている。この民話は、「ケチはダメ（*amai iba*）」というメッセージを伝えている。プナンにとって、寛大であることは重要な美徳である。

　プナンは、つねに、もらったものを惜しげもなく誰かに分け与えることが期待されている。私が年二回のペースで訪れる際に、いつも世話になっている男性の家族にお土産として持っていく時計やポーチ、バッグなどは、すぐにそれらをねだる別の誰かの手に渡る。さらにそれらは、また別の人へと渡っていく。遠く離れた森の狩猟キャンプを訪ねた折に、見知らぬプナンの男が、私がある人物にプレゼントした日本製のウェストポーチを身につけていたことがあった。贈り物は、自らのもとに抱え込むのではなく、それを欲しがる別の誰かに惜しみなく分け与えることが期待されている。

　もらった贈り物を他人に分け与えることは、プナンが生まれながらに持っている「徳」なのだろうか。いや、そうではないように思われる。私がプナンの居住地を訪ねていくと、ホストファミリーからは、お土産をけっしてみながいる前で見せないように言われる。みなが、あれが欲しい、これが欲しいと言って品物を持ち帰ってしまい、手元には何も残らないことを危惧するからである。逆に言えば、手元にものを置いておきたいというのが本心であり、「社会慣習」として、ものを惜しみなく他人に与えることがおこなわれているということだ。

　ある時のことである。私が幼児に飴玉をいくつか与えると、彼女はそれらを独り占めしようとした。周囲にいる子どもが欲しそうにｂナガめていたが、幼児は飴玉をしっかりと身に引き寄せて手放そうとはしなかった。母親がそれを見て、傍にいた子どもたちにも分け与えるようにｃ促した。最初はな様子だったが、母の教えに従って、幼児は飴玉を他の子どもたちに配り始めた。プナンは、そのようにして後天的に、与えられたものを分け与えるという規範を社会に広く行き渡らせてきたのである。ものを惜しみなく分配するという寛大な精神は、けっして生まれながらのものではない。

　ケチの小さな芽は、見つけられたらただちにつぶしにかからなければならない。

　フランスの社会学者マルセル・モースは、ニュージーランドのマオリのものの霊、「ハウ」を取り上げたことで知られる。マオリは、贈り物が贈り手から移動する時に一緒に移動する「贈与の霊」のようなものがあると考え、それをハウと呼んだ。ハウは贈り主のもとに帰りたがるので、別のものに乗せてお返ししなければならない。

　アメリカ大陸では、インディアンたちもまた、贈り物を交換し、何かをもらったら必ずお返しをしていた。インディアンは、白人の行政官が村を訪れた時に、みごとなパイプを贈り物として贈った。数ヶ月後、インディアンが、その白人のオフィスを訪れると、暖炉の上にそのパイプが飾ってあるのを見て、「白人はもらったもののお返しをしない。それどころか、もらったものを自分のものにして、飾っている。なんという不吉な人々だ」と感じたのだという。インディアンにとって、贈り物は、白人がするように、飾っておくべきものではなかったのである。

　中沢新一によれば、インディアンにとっては、贈り物を自分のものにしてはならず、贈り物は動いていかなければならなかった。贈り物と一緒に「贈与の霊」が、他の人に手渡される。「贈与の霊」は、別のかたちをした贈り物にそえてお返ししたり、別の人たちに手渡したりして、動かさなければならない。中沢は、「贈与の霊」が動き、流れてゆく時、世界は物質的にも豊かになり、人々の心は生き生きとしてくるのだと言う。

　資本主義のもとでは、資本が一ヶ所に集められ、事業に投下されることによって経済活動がおこなわれる。やがて、お金がどこかにためこまれ、経済が停滞すると、社会そのものに活力がなくなってしまう。そうしたお金と社会が関係している点に着目し、「お金は老化し、消え去らなければならない」と唱えたのがドイツの経済学者シルビオ・ゲゼルである。世界恐慌の時代、財政ｄ破綻にｅ陥ったオーストリアのとある町議会は、その町だけで通じる「自由貨幣」を発行することを決めた。それ以来、地域通貨を導入し、貨幣を循環させ、人と人のつながりを生みだし、社会に活気を取り戻すための取り組みが世界各地で行われてきた。資本主義が抱える課題の先に見出された地域通貨の中にもまた、①「贈与の霊」の精神を確認することができる。

　プナンには、「贈与の霊」そのものズバリの考え方はない。しかし彼らも、ものに「贈与の霊」があるかのように、ものをｆ滞らせることなく、循環させようとしている。人が人にものを贈る。もらった人は別の人にそのものを贈る。そのことにより、ものは特定の個人だけに留まることはない。個人占有の否定、つまりケチの小さな芽をつぶすことは、原理的に、ものを循環させることにつながっている。

　プナン社会では、与えられたものを寛大な心ですぐさま他人に分け与えることを最も頻繁に実践する人物が、最も尊敬される。そういう人物は、ふつうは最も質素だし、場合によっては、誰よりもみすぼらしいふうをしている。彼自身は、ほとんど何も持たないからである。ねだられたら与えるだけでなく、自ら率先して分け与える。何も持たないことに反比例するかのように、彼は人々の尊敬を得るようになる。そのような人物は、人々から「大きな男（*lake jaau*）」、すなわちビッグ・マンと呼ばれ、共同体のアドホックなリーダーとなる。そうしたリーダーのあり方は、高級なスーツを身にまとったり、高価な時計を腕に着けたり、ピカピカの高級車を乗りまわしたり、平気で公金を私的に流用したりする先進国の（一部の）リーダーたちとなんと違っていることか。

　与えられたものを他人へとすぐさま与えて、ものを循環させるスピリットを持っていれば、彼のもとには、その徳を敬い、彼のことをｇシタう人々が集まる。彼の言葉は、集まってきた人々に受け入れられ、人々を動かす原動力になる。ビッグ・マンの口から言葉が発せられれば、人々は狩りに出かけるし、言い争いはｈ鎮められる。

　逆に、彼が個人的な欲に突き動かされるようになり、与えられたものを独り占めして出し惜しみし、財を個人の富として蓄えるようになれば、彼が発する言葉はしだいに力を失っていく。それだけでなく、人々はしだいに彼のもとを去っていく。その時、ビッグ・マンはもはやビッグ・マンではなくなっている。プナンは、ものを惜しみなく分け与えてくれる男性のもとへと集うのである。

　なぜそこでは、このような社会道徳が発達してきたのか？　それは、食べることと生きることに深く関連するように思われる。狩猟に出かけて獲物が獲れなくても、隣の家族で獲物が獲れた場合には、そちらに行って食べさせてもらう。逆の場合、つまりこちらで獲物が獲れてあちらで獲れなかった場合、こちらはあちらに惜しみなく食べ物を分け与える。そうすることで、共同体の誰もが、空腹に困らず、つねに食べることが可能になる。つまり、ものがある時に惜しみなく分け与えることで、ものがない時に分け与えられることを保証する仕組みが築かれてきたのである。モースは、社会全体に自然の恵みが行き渡るこうした交換様式を「全体的給付体系」と呼んでいる。その仕組みを支えるために、プナンでは「ケチはダメ」という規範が広く浸透しているのだと思われる。

　ものをもらった時、何かをしてもらった時に、相手に対して感謝の気持ちを伝える「ありがとう」という表現は、プナン語にはない。ふつう、贈り手に対しては、その場では、何の言葉も発しない。他方で、「ありがとう」に相当する言い回しとして、*"jian kenep"*（よい心）という表現がある。それは、「よい心がけ」であると、贈り手の分け与えてくれた精神性を称える表現である。感謝されるのではなく、分け与える精神こそが褒められるのである。

　その意味で、ビッグ・マンは、「よい心がけ」という言い回しによって表される文化規範の体現者でもある。熱帯の狩猟民は、有限の自然の資源を人間社会の中で分配するために、独自の贈与論を生みだしてきた。

　ビッグ・マンが発する言葉は、共同体の中でひときわ大きな意味を持つ。「キエリテン」の起源を語る神話が、そのことを端的に示している。かつて人を含むすべての動物の頂点にｉクンリンする王だったキエリテンは、人間に大木を切り倒すように命じ、「耳かきをつくれ」と命じたのである。巨木を切り倒しておいて、そのようなちっぽけなものをつくるように命じるキエリテンには、まったくリーダーとしての資格はない。キエリテンは、やがて王位から滑り落ち、臭い屁をるだけの動物へと転落したのである。

　さて、この熱帯の贈与と交換の仕組みの中で、誰が最も強い存在であろうか？　それは少なくとも持つ者ではない。何も持たない者こそが、そこでは最強である。

　〈彼〉／〈彼女〉はつねに〈私〉の持ちものをねだりにやって来て、〈私〉から持ちものを奪い去っていく。〈私〉にとっての〈彼〉／〈彼女〉である他者は、何も持たない者であるからこそ、〈私〉を脅かしつづける。〈私〉は、つねに物欲を抱えているからである。そのうちに、物欲とともに、〈私〉はこの仕組みのｊウズに呑みこまれる。〈私〉は、やがて持たないことの強みに気づくようになり、最後には、持たないことの快楽に酔い痴れるようになる。

　その意味で、②熱帯の贈与論における「他者」とは、たんにねだりにやって来る〈彼〉／〈彼女〉のことではない。それは、〈私〉が目指すべき、ねだっては与える〈私〉、すなわち「自己」でもあるのだ。プナンの小宇宙では、③こうした持つことと持たないことの境界が無化された贈与と交換の仕組みが深く根を張っていて、貨幣を介して、持ちものやお金をためこもうとたくらんで外部からしてくる資本主義をばらばらに解体しつづけているのである。

（奥野克巳『ありがとうもごめんなさいもいらない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』による）

【注】○プナン―東南アジア、ボルネオ島内陸部の森林に居住する狩猟採集民の総称。

　　　○マルセル・モース（Marcel Mauss, 1872-1950）―フランスの社会学者、民族学者。

　　　○マオリ―ニュージーランドの先住民族。

　　　○中沢新一（なかざわ　しんいち、1950-）―日本の人類学者、宗教学者、思想家。

　　　○シルビオ・ゲゼル（Silvio Gesell, 1862-1930）―ドイツの実業家、経済学者。

　　　○自由貨幣―シルビオ・ゲゼルが考案した通貨制度で、発行日が明記され時間の経過とともに価値が減っていく貨幣。

　　　○アドホック―「暫定的な」、「その場限りの」などの意。

　　　○キエリテン―イタチ科の動物。

問１　傍線部ａ～ｊのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問２　プナン社会について書かれた次のア～カの記述のうち、本文と合致しているものには○、合致していないものには×を、それぞれ解答欄に記入せよ。

ア　マレーグマは、尊敬される人物のたとえである。

イ　ものは特定の個人だけに留まることなく循環する。

ウ　個人的な欲に突き動かされることなく、与えられたものにはすぐにお返しをする。

エ　プナンの幼児は、教えなくても飴玉を分け与える。

オ　贈り手への感謝よりも、分け与える精神をたたえる。

カ　キエリテンは、ビッグ・マンのたとえである。

問３　傍線部①について、地域通貨の中に「「贈与の霊」の精神」が確認できると筆者が考えるのはなぜか、本文に即して一〇〇字前後（句読点・かっこ類も字数に含める）で説明せよ。

問４　傍線部②について、プナンのような狩猟民の社会で「熱帯の贈与論」が生み出された理由を、本文に即して一〇〇字以内（句読点・かっこ類も字数に含める）で説明せよ。

◎問５　傍線部③について、「持つことと持たないことの境界が無化され」るとはどのようなことか、本文に即して一二〇字以内（句読点・かっこ類も字数に含める）で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ａ＝垂　　　　　ｂ＝眺　　ｃ＝ウナガ　　ｄ＝ハタン　　ｅ＝オチイ

　　　ｆ＝トドコオ　　ｇ＝慕　　ｈ＝シズ　　　ｉ＝君臨　　　ｊ＝渦

「漢字は読みをカタカナに」改めるよう指示されている。

問２　ア＝○　イ＝○　ウ＝×　エ＝×　オ＝○　カ＝×

問３　Ａ貨幣が貯め込まれることで、経済が停滞してしまう資本主義に対し、Ｂ貨幣を循環させて社会の活気を取り戻そうとする地域通貨の理念は、Ｃ贈り物を循環させて人々の心を生き生きとさせる「贈与の霊」という考え方と同じだから。（103字）

Ａ＝２／Ｂ＝４／Ｃ＝４

Ｂ・Ｃが同じであることを説明できていなければ減点３。

問４　Ａ熱帯の狩猟民は有限の資源の中で生きているので獲物が獲れない場合もあるが、Ｂその際ある者がない者に惜しみなく分け与える仕組みがあれば、Ｃ自然の恵みが行き渡り共同体全体が食に困らないという利点が生まれるから。（100字）

Ａ＝２〔「有限の資源」の説明は必須。〕

Ｂ＝４〔「分け与える仕組み」の説明は必須。〕

Ｃ＝４〔Ｂの仕組みがあるとどうなるかという観点から書かれていること。〕

問５　Ａ持つことと持たないことによって自己と他者の区別が生まれるが、Ｂ何も持たないからこそ強い他者は自己にとっても理想の存在である一方で、Ｃ物を分け与えることで「持つ」者は「持たない」者へと転換するので、両者の区別は意味を失うということ。（113字）

Ａ＝２〔自己と他者の区別の説明が必要。〕

Ｂ＝４〔（持つ者が）「持たない」ということを理想として目指すということが書けていること。〕

Ｃ＝４〔「無化」を言い換えること。〕